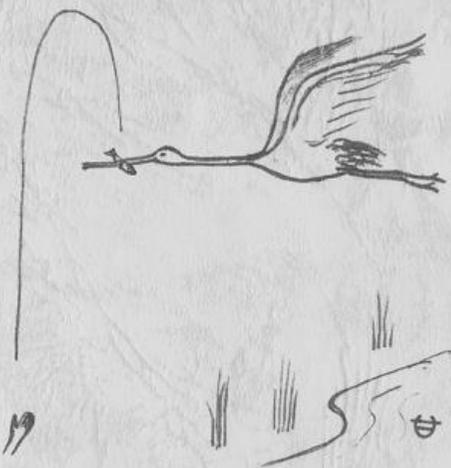


”富士見市の昔ばなし”

『太郎兵衛さんと鶴とお墓』



あまみ じゅうじやく
甘 十 楽

“富士見市の昔ばなし”

『太郎兵衛さんと鶴とお墓』

「お父^とう、支度^{したぐ}ができたよーッ」

「おーッ出来たか、じゃぼちぼち行くか」

東の空がいくらか明るくなった朝の事です。頑固^{おんこ}だけど正直者^{せいかく}の親父^{おや}と、氣立ての良^{せがれ}い働き者の倅^{せがれ}が、新河岸川^{せがれ}に仕掛けた、魚を取るための竹籠^{かご}（筈^{はず}と云いましたが）それを引き上げに出掛けようとしているところです。

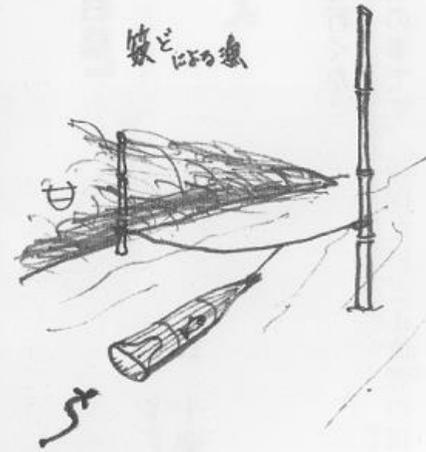
さて、このお話は、おばあちゃんが、そのまたおばあちゃんから聞いた話しです。

あまみ じゅうじやく
甘 十 楽

昔々、東に向って伸びて来た雑木林の台地が終って、低い平らな畑が広がろうとするあたりに、仲の良い親子が、半分を農業、半分を新河岸川で漁りょうをしたりして暮らしていたんだそうだ。

親父は頑固なほどに熱心に仕事をするので畑も田た圃ぼも良く出来たし、竹細工で作る漁の籠かごや、台所で使うざる等も名人と云われる程に上手に出来たので近所の人にも分けてあげたりして喜ばれていました。

伴は、そろそろ二十才になるので、力も付いて来て、親父の種の蒔き方や、稲の刈り方、漁の仕掛け方、籠の造り方等、一生懸命、手伝いながら、おぼえ



ていました。そんな事だから、貧しい土地だけど、年具を正直に納めても、どうやら食べるのには間に合っていました。

ある時、川の漁を終おえて、土手へ上る芦原のところまで、「キーツ」と云う声とバサバサツとはげしい羽音が聞こえて来ました。二人が急いで音のする方へ駆けつけて見ると、狐きつねが鶴の足に噛み付いているではありませんか、「こら！ ツなにするんだ」と伴が、かっついていた竹竿で狐の背中をたたきました。驚いた狐は「ケーンツ」と鳴いて口を離し、いちもくさんに芦原の奥へ逃げていってしまいました。鶴もとっさ

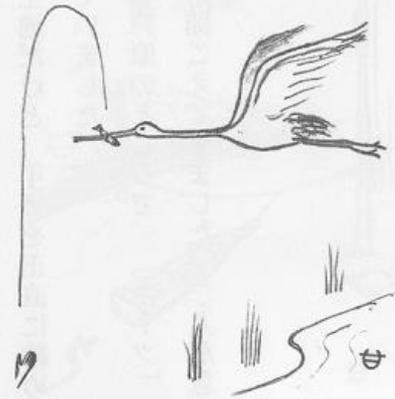


に飛び立っていました。助けてくれたお礼を云うかのように、空を円く親子の上を飛んでいます。

「恐かったろう、これからは気をつけるんだぞー」と伴が言い。

「これでも喰べて元気をだせよー」と親父もいって、漁で獲った内の、小魚を一匹、空へ向って投げ上げてやりました。鶴は、わかったのかスーッと寄って来て、その長いくちばしの嘴で上手につかまえて、さらにもう一回ぐるりと空に円を書いて、西のお寺のある山の方へ飛んでいきました。

ある晩こんな話になりました。



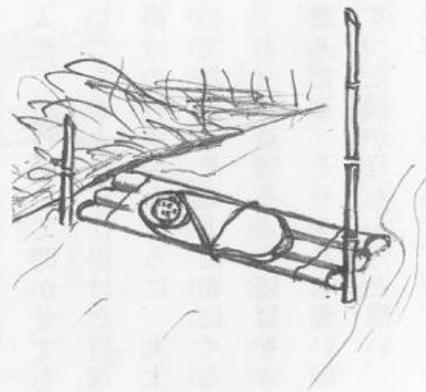
「お前も、どうやら何んでも出来るようになって食べて行けるだろうから、そろそろ嫁をとらねばなあ」

「お父とう、嫁こと云えば、どうしておらにはおつ母かがいないんだべ、今までお父とうが、めしたきでも、洗濯でも教えてくれたから、何もふじゆうなく暮らして来ていたので、気にもしていなかったんだけど」

「そうか、お前もそろそろ一人前の大人だ、もう話して聞かせてもいいだろう：：、実はなあ：：、お父とうがいつものように仕掛けた竹箆を引き上げに川へ行つて見るとなあ、仕掛けの竹竿のところ、丸太を三本つないだ、小さな筏いかだが流れついていてなあ、その上に布にくるまった赤ん坊が、寝かされていたんだよ。お父とうが近寄ると急に目をさまして、こつちを向いてニッコリと笑ったんだよ。そりゃあ可愛い顔をしていたもんだ。お父とうは、神様とうがくださった授さずかりもんだと思ひ、役場へ届け出でて、お父とうの子として、太郎兵へい伍」と云う名で、育てさせ

てもらおうことになったんだよ。それからは、育てるのにせいっぱい、夢中だったので、女房をもらうことも考えずに来ちまってなあ。それで、かわいそうだけどお前に、おっ母^{かあ}はいないんだ。そのかわり、近所のおっ母^{おちち}にお乳^{ちち}を分けてもらったり、おむつの取り替え方を教わったり、村の人にも親切に

もらって、どうやらここまで育てることが出来たんだよ。そして、こんなにも素直^{すなお}に、働き者に育ってくれて、お父^{とと}は毎朝お日様に向かって手を合せる時、「良い俵^{たわら}を授けて下さって有難うございます」、とお礼を言っているんだ、だから、今までも、これからお前は一番大切な



お父の俵だよ」

話を聞いて俵は、ひざから力が抜けるような、信じていたものが無くなったような、急に一人にされたような、寂^{さび}しいような、怒りたいような気持ちになりました。

それでも、だまって夕食の後かたづけをすると、「ちよつと星をみてくるよ」と言っだまて小屋を出ました。親父も黙だまって少しさびしそうに、うつむきかげんに竹網みの仕事をしながら見送りました。

川の土手に立ちつくし、空を見上げていると、星はいつもと変わらずキラッキラツと光っています。

「そうだ、いつもと何も変らないんだ、神様がそう決めてくれたんだ、たとえ血がなくならなかつたって、他^{ほか}の親子よりも、もつと大切に苦勞しておらを育ててくれたんだ。お父だ、おらのお父だ、お父をかなしませるような事をしては申し訳が立たねえんだ」、お星様に向っ

て、太郎兵伍はつぶやくのでした。

「お早ようッお父支度とちうが出来たよーッ」翌朝から、またいつものように元気な一日が始まりました。

ときどき、あの鶴も片足を少しひきずるようにしながらも、近寄って来ては魚をねだったりして、遊んで行くようになっていました。

こうして、さらに幸せな日が続いていました。

「太郎兵伍さあんツ親父おやじさんが大変だよーッ」近所の村の衆が、畑仕事をしている俵のところへとんで来て教えてくれました。

今日は、お父と手分けをして、お父は山の方へ、山菜や木の実摘みに行っているはずでした。

俵が駆け付けると、山のすそでお父が倒れていました。かろうじて

息はしています。村の衆に手伝ってもらい、戸板に乗せて小屋まで運び入れました。

医者様が言うには「重い病気で、今では手のほどこしようもない、せいぜい看病し、孝行しなさいよ」だけだった。

それからは、俵はお坊さんや長老に聞いたり、遠くの物知りと云われるおばあさんを訪ねたりして、病気に良いと云われるいろいろな草の根、木の実等を探し歩き、夜なべで造った竹ざると交換しては手に入れて、お父に試ためしました。だけど、お父はだんだんやせて行くようでした。

いろいろ聞いた話の中には「鶴の肉」が効きくのでは、と云うのもあったけれども、鶴は禁猟になっていて、ご法度はつとを破れば、磔はりつけ獄門ごくもんと聞いていたので、俵の頭からはすぐに消え去っていました。

こうしてさらに看病を尽し続けていました。

ある朝、小屋の戸をコツコツとたたく音に起されて開けて見ると、口ばしでたたいたのでしょうか、あの鶴が立っていて、片足のままチョンチョンと前を廻り始めました。もう一方の足は、ついに腐り始めたようにぶら下っています。そして一周まわり終ると入口のところでパツタリと倒れてしまいました。

まるで「私の肉を役立てて」と言っているようでした。

倅は「ありがとうよ、死ぬのが近づいて来たのを感じ、最後にここまで来てくれたのかい、お前の気持ちを無駄にはしないよ」と、お役所へ名乗って出るのを覚悟で、涙と共に鶴をさばき、その肉を、やらかく煮たり、お汁つゆにしたりして、お父に喰べさせ、その羽は庭の隅に埋め、丸木を立ててお墓にしました。

そんな倅のおこないを、村の人達もうすうすわかりはじめましたが、普段から親父に尽している孝行ぶりを知っていたので、誰も告げ口な

どするものはいませんでした。

鶴の肉の効き目があったのか春めいた日には、お父は少しよくなる様子を見せ、「倅や、苦勞をかけてすまないなあ」なんて、ほほえんだりすることもありました。夕やけ雲の赤い日、静かに息を引き取りました。

「申し訳けありませんでした。ご法度の鶴を喰べました」と、お父の葬式をすませた日に、お役所に名乗り出ました。

お役所も、近所のうわさで孝行息子であることは承知していたので、今まで、知らないふりをしていたのですが、名乗り出られた上に、小屋のわきに鶴の墓まであるのでは、ほおって置くわけにも行かず、ついにご法度通り、刑が執行されることになりました。

そんな倅をあわれんで、村の人達が揃って願い出て、その亡骸なきがらをも

昔話「太郎兵衛さんと鶴とお墓」

発行 2006年11月28日
著者 甘十楽 (あまみ じゅうらく)
印刷・製本 志賀堂印刷

※筆者の甘十楽氏の了承を得て
同冊子をコピーして開示しております。



らい受け、刑の行われた近くの鶺鴒うすらのたもとに「太郎兵衛の墓」を建てて弔とむらい、孝行息子を末永く偲おもいでくれました。
村のばあさま達が、孫をつれて土手に摘み草に来た時などにも、立ち寄っては手を合せ、この話を代々伝えて、言っいって聞かせました。
(今でも、鶺鴒のたもと、十代目横田清一様の敷地の東に、あたたかく、手厚まもく護られ、花を供えられて、「太郎兵衛の墓」はある。)